

だいりき
大力のワーニャ

プロイスラー 作 大塚勇三 訳



943 Preussler, Otfried

大力のワーニャ

プロイスラー作 大塚勇三訳

学習研究社 昭和48 (1973)

275p, 23cm, (世界の傑作童話・12)

原題: DIE ABENTEUER DES
STARKEN WANJA

世界の傑作童話・12

大力のワーニャ

訳 者・大塚勇三

発行人・古岡秀人

編集人・石井和夫

印刷所・信毎書籍印刷株式会社

製本所・有限会社黒田製本所

発行所・株式会社学習研究社

東京都大田区上池台4-40-5

振替東京 1 4 2 9 3 0

©1973

4801

*この本についてのお問い合わせ、製本上のミスなどがありましたら、下記あてお知らせください。
文書は、東京都大田区上池台4-40-5(〒145)学研ユーザー・サービス本部事務局「児童図書係」
電話は、東京 (03) 727-1600 東京 (03) 720-1111 内線 352, 353

だ い り き
大力のワーニヤ

プロイスラー 作
大塚勇三 訳

堀内誠一 画

19
26
3
「
チ
タリ
ーク
ラフ」



大力だいりきのワーニヤ

もくじ

第一だいの書しよ

ワーニヤと兄あにたち

または

パンやきかまどの七ねんかん年間





第二の書 だいにしよ

91

数なら左 かず ひだり — ワシなら右 みぎ

または

槍と馬と皇帝のよろい冑 やり うま こうてい かぶと

第三の書 だいにしよ

201

白い山々のかなたで しろ やまやま

または

夢が実現する ゆめ じつげん

訳者あとがき やくしや

274



W. H. M. M. M.

○編集委員

大塚 勇 三

渡 辺 茂 男

内田莉沙子

○装丁

辻 村 益 朗

DIE ABENTEUER DES STARKEN WANJA

by Otfried Preussler

Original German edition published

by Arena-Verlag Würzburg.

©1968 Arena-Verlag Würzburg

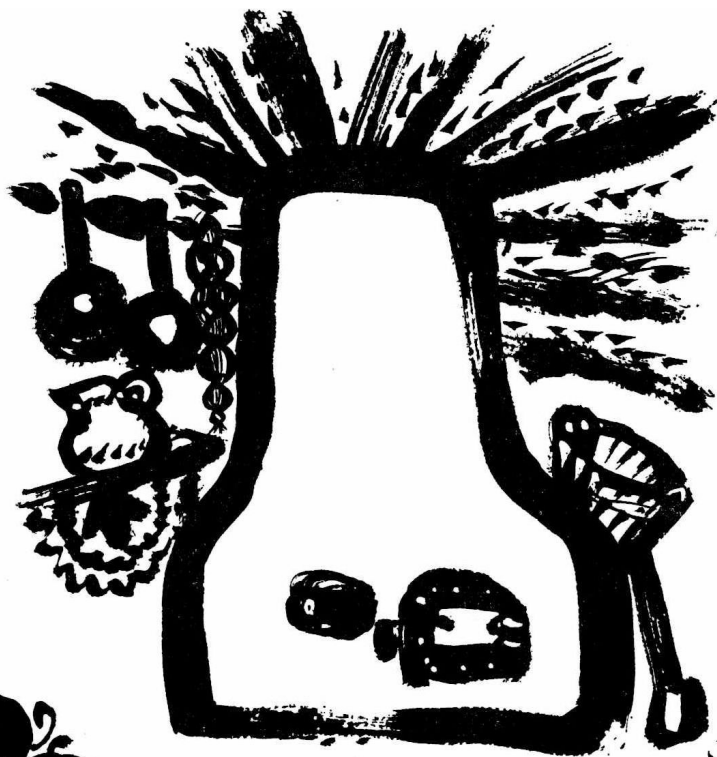
Japanese translation right arranged
through Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo.



第一の書



ワーニャと兄たち
または
パンやきかまどの七年間





かしむかし、聖なるロシアの地に、ワシーリィグリゴーレヴィッチというお百姓がいて、グリーンシャ、サーシャ、ワーニャという三人のむすこをもっていました。上のふたりのむすこ、グリーンシャとサーシャとは、しっかりした、はたらきものの若者でした。ふたりは、父といっしよに、家の中でもうまやでも、畑でも野原でも、森でも川のそばでも、おとなとおなじにはたらきました。ふたりがとりかかりさえすれば、冬の雪かきだろうと、夏の穀物のとりいれだろうと、さっさと、たしかにやってのけるのでした。ワシーリィグリゴーレヴィッチは、このふたりに満足できるといふものでしたし、じっさい、満足していました。

それにひきかえ、この家の三番むすこワーニャは、とほうもないなまけものでした。ワーニャがしごとをきらいなことといったら、犬がイラクサをきらいなよう。しごとをやっているところにきかかると、大まわりしてよけるのでした。ときどきワーニャは、何時間も、家のうしろのミツバチかごのわきに、目をつぶってしゃがみこみ、日の光に肌をてらされながら、うつらうつらと目をすごしていました。たべるのと、ねるののほかには、これが、いちばんすきなしごとでした。

まことにもったもなことです、グリーシャとサーシャとは、こんなようすにむかむかしていました。もしも、すきなようにできるものなら、ふたりは、とくにワーニャのなまけぐせをたたきだしたことでしょうし、それも、おやさしく、きれいな言葉をつかつてじゃなかったでしょう。けれど、ワシーリィグリゴレーヴィッチはワーニャをたいそうかわいがっていて、そんなことをさせませんでした。それに、もし、この人が、ある日、べつな気になったとしても、まだもうひとり、小さい、せむしの年とったお婆さん、アクリーナがひかえていたのです。

このお百姓のおくさんが何年もまえになくなってからというものの、アクリーナが家のしごとをきりまわしていたのです。このアクリーナは、このうえなしにすてきで、氣だてがよく、ともしんせつな年とったお婆さんでしたし、おまけに、すばらしい料理人でした。煮たり焼いたり腕にかけては、この村にはだれひとり、アクリーナの右にでる人はいませんでした。たとえば、アクリーナのパンケーキといえば、この地方じゅうに知られていました。いっぺんそれを味わった人は、それを思いだしただけで、たちまち口につきがたまったくらいです。でも、そのことは、まあ、このくらいに！

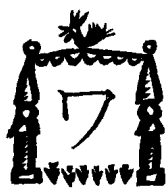
アクリーナおばさんには、たった一つだけ、むぎになっておこることがありました。もしも、グリーシャとサーシャとが、おばさんのいる前で、ワーニャの文句をいおうもんなら、ひそひそやろうと、小声でしゃべろうと、とんでもないこと！ たちまち、おばさんは、かっとなって手を打ちならし、たちまち大さじか火かき棒をふりかざして、おこりだします。

「ワーニャをそっとしておおきよ、いいかい！ あの子がなまけもんだからって、それがあの子のせいかね？ 神さまがあの子をそうおつくりになったんだからね！ 神さまには、なにかお考えがおりなんだろうよ。……それで、これはいつとくがね、あたしが生きてるうちは、あの子の髪の毛一本だっていじくらせるもんじゃない。おまえたち、これを耳のおくにしっかりしまっておおき。さもないと、きょうからあとは、水っぽいスープと、ひからびたパンしかもらえないよ。……それに、日曜だって、せいぜいのところ、しょっぱいカラスムギのおかゆだから！」

人のいい、お年よりのアクリーナおばさん！

まるでおばさんは、もうこのころから、心のずっとずっと奥のほうで、感じとってでも

いるようでした。……村の人たちが《なまけのワーニャ》とよんでいる、このワーニャが、いつの日か、とほうもない事業をなしとげるだろう、……国じゅうの人々が長く語りつたえるような事業をなしとげるだろう、と。



ーニャは、その冬の終わりに十七になりました。そして、それにつづく春に、このちのすべての始まりになった、あのきみょうなできごとがおこったのです。それは、復活祭（キリストの生まれかわりを記念する祭り。春分）のまえの週のことでした。野原は日一日と緑になっていました。流れのそばのヤナギの木々は、黄金色の、ふとい花の穂をつけました。そして、村のおかみさんたちや、むすめたちは、やっとのことで、おもたくて暗い色の毛織の服をぬげるようになりました。

グリーンシャとサーシャとは、朝もずっと早くから畑をたがやしにいていました。ワシリーリグリーンゴーレヴィッチは、うまやのうしろの野菜畑をほりかえしていました。アクリーナおばさんは、家の中や台所で、ヤマネみたいにすばしっこく、せっせとしごとをしていました。ただワーニャだけは、ミツバチかごのわきで、のらくらと、日なたぼっこをし

ていました。

一時間じかんまた一時間じかんと、時はとき過ぎていき、もう午前ごぜんもおわろうかというころ、アクリーナおばさんがワーニャをさがして、家のうしろにかけてきました。

「ワーニャや、いい子こだから、ひとつ、たのまれておくれでないかね？ あした、あたしは復活祭ふっかつさいのそうじにかかるの。だから、森もりにでかけてって、あたらしいほうきがつくれるように、シラカバの枝えだを一かかえとってきておくれよ！」

「今いますぐに？」と、あくびしながらワーニャはききました。「もうすぐ、お昼ひるだよ……」

「なあに、だいじょうぶ。袋ふくろにおいしいものをつめて、もたしてあげる。パンに、ベーコン、かたゆでの卵たまごを二つと、羊チーズひつじを一かけら……」

「それに、パンケーキも一つ、くれるかね？」

「二つでもいいよ。でも、早いとこやとくれ。おまえのために、復活祭ふっかつさいのそうじを降臨こうりん節せつ(キリストが生まれかわつてから五十日めのお祝い)までのばすってわけにやいかなからね！」

おばさんは、いそがしげにふっとんでいって、家いえの中にきえました。ワーニャは、べつにいそぎもせず、ぶらりぶらりとあるいて、手斧ておのがおいである材木小屋ざいもくこやにきました。そ

して、いちばんかるい斧おのをえらびだすと、こんどは台所だいどころにでかけて、べんとう袋ぶくろをもらいました。

「早くはやかえつといで！」と、おばさんがうしろからよびかけました。「それから、枝えだは、たっぷり長ながくて、しなやかなのにしておくれ。細ほそすぎもしないし、ふとすぎもしないのをね！ ねえ、わかってるね！」

その日ひは、この時節じせつにしては、だいぶあたたかい日ひでした。ワーニャは、途中とちゆうで汗あせなかかかないようにと氣きをつかいましたが、それは、そんなにかんたんではありませんでした。かれは、ゆっくり一歩いっぽ一歩いっぽとすすみました。こうして、森もりのはずれについたとき、かれは、腹はらがすいているのに氣きがつかしました。

「まあ、いいや。それじゃ、まず昼飯ひるめしとしよう。」

シラカバには、まだ葉はがついていませんでした。ワーニャは、木々きぎのあいだの日ひあたりのいい草地くさちをさがしだすと、袋ふくろのひもとをとき、アクリーナおばさんがつめてくれたものを、のんびりおちつきはらって、たいらげました。パンにベーコン、卵たまごと羊チーズひつじと、それにパンケーキを二つとも。それといっしょに、木きのびんにはいつていたクワス（葉や実芽実やみよなどでつくるビールに似た飲みもの）

も、すっかり飲みほしました。

最後の一きれをのみこむと、おもわずあくびがでてきました。たべたのと飲んだのとでねむたくなつて、ワーニャは、こうきめました。

「ちよいと一時間ばかり横になろう。それからしごとにかかっても、たっぷりまにあうつてもんさ。」



ーニャは、草の上に長々とねそべって、目をとじました。日の光は、葉のな
い枝々のあいまからさしこんで、気もちよくあたためてくれました。

「これで、くろうなしごと、しばらくはがまんができるっていうもんだ。」
と、かれは、おもいました。

もう半分ねむりこんだころ、ワーニャは、とつぜん、ふしぎな物音を耳にしました。カタカタいうような音が、森のおくのほうから、しだいに近づいてくるのです。だれかが、そつちのほうで、杖で木々をたたいているのでした。すばやく、不規則な、みじかい間をおいて……。

トン……トン……トン……トン……トン……

ワーニャは、すこしからだをおこして、目をこすりました。すると、背の高いひとりの老人が、森をぬけて、こっちにくるのが見えました。ひげもまっ白だし、ひろがった長い髪もまっ白な人です。それはワーニャの知らない人でした。この老人は、この村の人でもないし、となりきんじよの村の人でもありません。老人は、灰色の布でつくった巡礼服をきていて、あるきながら、もっている旅の杖で、ひっきりなしに木々をたたいていましたが、それというのも……めくらだったからです。ワーニャは、近くからながめた今、はじめてそれに気がつきました。

めくらの老人は、どうやら、きめた目標にこうと努力しているようでした。そして、しばらくすると、もううたがいもなく、その目標というのはワーニャでした。ワーニャの前、二歩のあたりで、老人は立ちどまりました。そして、腕を十字にくんで、おじぎをすると、したしげにワーニャに話しかけました。その声は深くて力づく、その中には、なにかのひびきがこもっているようで、ワーニャはミツバチのむれのうなり声を思いだしました。

「おまえが、この村むらの農夫のうふワシーリィグリゴーレヴィッチのむすこ、ワーニャかな？ わしは、おまえに話はなしがあるのだよ。」

「おいらに？」と、ワーニャはびっくりしてききました。

それに返事へんじするかわりに、めくらの老人ろうじんはワーニャのわきの草くさにすわりこんで、それから、いいだしました。

「おまえは、なんというかな？ もしも、だれかがやってきて、おまえが皇帝こうていになると告つげたなら？」

「そんなの、わらいとぼしてやるね。」と、ワーニャはいいました。

「ところが、ここからとおくの、ある国くにで、皇帝こうていの冠かんむりがおまえを待まっているのだよ。」と、老人ろうじんはつづけていいました。

「おいらを？」ワーニャはもうこらえきれず、ほんとにわらいだしました。「あんたはわかつちやいないようだね、おじいちゃん。おいらが、なまけのワーニャだってことをさ。そのおいらが、……皇帝こうていになるって！」

「まあ、わらうがいい！」めくらの老人ろうじんはしんぼうづよくいいました。「すっかりわらい

